

文化・芸術

「アクロポリスの空」

1938年、油彩、カンバス
80・3センチ×65・2センチ（個人蔵 寄託作品）

難波田龍起（1905～97年）

難波田龍起は、急速に変化する社会の中で一貫して自己の内面を見詰め、詩情豊かな作風を展開した、戦後日本の抽象絵画を代表する画家の一人です。抽象を描く前の画業の初期には、古代ギリシャやローマの美術に憧れ、古代彫刻や建築をモチーフとした連作を制作しました。また、この時期は松本竣介と親交を深め、しばしば意見を交換し、ともに展覧会も開催しました。

本作は初期の連作の一つで、パルテノン神殿がそびえ立つ古代アテネの都市国家が画面に浮かび上がるように描かれています。それは、茶褐色の絵の具を薄く塗り、削ることが繰り返された触覚的な絵肌と相まって、難波田が古代の世界に抱いた思慕や幻想を色濃く漂わせています。また、その絵肌や夢幻的な空間づくりに、同年に制作された松本竣介「街」（大川美術館蔵）との共通点もうかがえます。

この作品は、18日からのコレクション展でご覧いただけます。

（佐藤）

《名画の扉》

大川美術館コレクション展から

